



THE ROTARY CLUB OF HIROSHIMA-RYOHOKU

広島陵北ロータリークラブ

- The Weekly Report -



～ クラブのテーマ ～

こころゆたかなロータリアン

～ 本年度会長方針 ～

活力漲る楽しいロータリー

世界へのプレゼントになろう

2015-2016 R.I.会長メッセージ

第1173回例会 2015年8月5日 No.1142号

■ 会長時間



会長 川中 敬三

私共に関する記念日と称して色々取り組んでいるものに、6月19日が食育の日、10月1日が醤油の日、この10月1日は、他にも日本酒の日、コーヒーの日でもあります。そこで本日の8月5日は、発酵の日です。

雨が多く湿潤な気候の日本には、多様な発酵微生物が存在し、日本人は古来より、それを積極的に活用して多様な発酵食品をつかって来ました。チーズやワインが単独の微生物で発酵させるのに対して、日本の発酵食品の多くが、麴を穀物の成分を分解する酵素源として使い、その次に乳酸菌や酵母が働くように、複数の微生物が順番に活動するのが日本の発酵食品の特徴です。

そうすることで微細で多彩な味わいや香りが生まれ和食の味、礎を築いてきました。その主たる物として、醤油、味噌、清酒、食酢、納豆、鰹節、ぬか漬け、梅干しなどたくさんあります。おいしさだけでなく様々な機能が現在では注目され微生物の発酵作用で作った食品を醸造食品とも呼ばれています。

人間の身にとっては、消化・吸収を促す機能が期待されていますが、最近では、その微生物が腸内環境を改善させる事があきらかに成り、便秘、肌荒れの軽減などや免疫力アップにも役立つと考えられているところです。

ところで、ロータリークラブでは8月は、会員増強・退会防止月間です。本年度、会員増強については、森川会員に先頭だって活動して頂いているところです。ロータリーにとっては、1に会員増強、2も会員増強、3が職業奉仕、4が社会奉仕、5が国際、青少年奉仕の順番だと思えます。ぜひとも本年は数多くの活力あるメンバーを増員したいものです。

本日は、そういった事から会員卓話者として、森川会員に会員増強そして8月6日原爆の日を明日に控え、平和について卓話を下田会員にお願いしているところです。有意義な卓話をお願いして会長卓話と致します。

今回の例会(8月12日)

来賓卓話

国際ロータリー第2710地区 グループ6

ガバナー補佐 小川 嘉彦 様

次回の例会(8月21日)

ナイター観戦家族会

※8/19の(水)変更

出席報告 (例会運営委員会)

8月5日(水)出席者

会員総数	51名	ご来賓	0名
出席会員	40名	ご来客	3名
欠席会員	11名	ゲスト	2名

来賓者紹介 (親睦家族委員会)

8月5日(水)出席者

広島RC	2名
広島東南RC	1名

【例会】 毎週水曜日(12:30～13:30) / リーガロイヤルホテル広島(広島市中区基町6-78) / 082-502-1121

【会長】川中 敬三 【事務所】広島市中区基町6-78 リーガロイヤルホテル広島13F

【幹事】高野 憲一郎 【ホームページ】<http://www.ryohoku-rc.jp/>

【TEL】082-221-4894

【FAX】082-221-4870

会 員 卓 話

森川 和彦 会員



原爆の日をむかえて

下田 敬三 会員

皆さん こんにちは、昨年の8月の会長時間で、私の兄(長男)が、海軍航空隊に志願兵として入隊し、21歳の若さで、南洋の島で戦死したお話をさせて頂きました。この度、例会運営委員長の小林さんから、「平和」について、卓話をお願いしたいとの話がございまして、引き受けはしたものの、少し心配しています。



昨日、8月6日は、広島に原子爆弾が投下され、一瞬のうちに、10数万人の尊い命が奪われ、そして今、なお被爆で苦しんでおられる人がいます。あの日から、68年を迎え、広島市は、「平和記念式典」、そして犠牲者のご冥福と平和を祈る一日でした。8月2日の中国新聞に、私が伝える「被爆体験」としての記事がございました。読まれた方もおられると思います。今、被爆者の高齢化が進むなか、本人に代わって体験を語りつぐ「被爆体験伝承者」を養成する広島市の事業が2年目を迎えました。養成を受ける人は、本人・家族以外が7割だそうです。よくテレビ等で報道されています、平和学習・修学旅行生に被爆体験を語っておられるいわゆる「語りべ」の方が、80歳以上の高齢者となっております。

私が、これからお話をさせて頂きますのは、すべて、父親・祖母から聞かされた事です。

私は、山県郡北広島町壬生(ユネスコの世界文化遺産に登録されました、壬生の花田植)で、6人兄弟の末っ子として、昭和16年3月に生まれました。第二次世界大戦の真ただ中であり、その年12月8日、日本海軍がハワイの真珠湾奇襲攻撃により太平洋戦争が始まった年であります。昭和20年8月6日、広島に原子爆弾が投下され、続いて8月11日には長崎にも原子爆弾が投下され、そして8月15日、日本は、無条件降伏し戦争が終わりました。この戦争で、母親は原爆で亡くなり、そして、先ほど話しました長男は、昭和19年2月に戦死致しました。原爆が投下された時は、自分は3歳5ヵ月で、末っ子であり母親にあまえていたそうです。お母さんが原爆で亡くなったことが分からないので、お母さんがいつ帰るのか泣きながら待っていたそうです。そのお母さんの顔は、微かにしか覚えていません。

なぜ、田舎に住んでいた母親が原爆の犠牲になったのか、前置きが長くなりましたが、これからが、本題の話になります。

会 員 卓 話

当時、長女が(16歳)学徒動員で呉の軍需工場で働いていました。その長女が、お母さんに会いたいために、身体の調子が悪いので面会に来てほしいと手紙を出しました。母親は、その手紙を読み、娘の体のことが心配になり、少しの食べ物を用意して娘を元気づけようと面会に行くことにしました。当時、田舎から町に出かけるのは、木炭バスも限られていて大変なことだったそうです。末っ子の自分を連れて行こうかどうしようか迷ったそうですが、真夏の暑いときであり、道中も大変と思い、一人で呉に行くことにしたのです。その日が8月5日です。

娘に面会し(娘は元気だったそうです。後から分かったことですが、長女は、母親に会いたいために仮病を使っていたのです)その日のうちに広島まで戻り、舟入南町の親戚の所に泊まり、翌朝(8月6日)早く、自宅に帰ろうと、親戚の家を7時過ぎに出て電車で紙屋町に向かいました。原爆が投下された8時15分、おそらく母は、紙屋町の爆心地に居たこととなります。

その時父は、八千代町上根に飛行場を作る現場で作業していたそうです。広島方面から大きな爆音と黒い煙が立ち上がったのが見えたといいます。それが原子爆弾であることは、その時は誰も知る由はありません。そして、まさか妻が、その爆弾の犠牲になるとは、思いもしていなかったのです。何でも、広島に大きな爆弾が落ちたようだ、地域の人は、言っていたそうです。しかし、その日にトラックで被爆した人達が帰ってくるのを見たときに、もしかして、妻が…と思ったそうです。日が暮れても帰る予定の母が帰って来なかったのです。父は、一睡もせず翌朝自転車で広島に行きました。横川に着くと、広島は、一面焼け野原となり、被爆で亡くなられた人、身体中が焼けただれた人、水が欲しいと川に飛び込む人…この世の地獄を目の前にして、呆然と立ちすくんだそうです。それから数日、母を探し歩いたそうですが、母は、紙屋町あたりで(爆心地)被爆しているので、影も形もないのです。

呉にいる長女も、広島に大きな爆弾が落ち広島市内が全滅だと知り、もしかして、お母さんが…と心配して実家に帰りました。長女が家に着いたのは、暗くなって、夕食の時間だったそうです。玄関でしばらく家の中の様子を聞いていたそうですが、母親の声は聞こえません。静かな中、幼い私が何かを言っているのが聞こえたそうです。姉は、お母さんが、いてほしい一心で戸を開けて中に入りました。すると父が、「節子か」(母の名前は、節子)と言い、玄関に飛んで出て来たのです。そこに立っていたのは、長女の君江でした。そこで、姉は、母親が帰っていないことを知り、泣き崩れたそうです。姉は、自分が母親に逢いたいために仮病を使い、母親が面会に来てくれたことで、原爆の犠牲になったことを思うと、自責の念に苛まれ、立ち直るのに相当の時間がかかったと聞いています。その姉は、原爆病院に入退院を繰り返し、70歳で亡くなりました。

父は、明治生まれの頑固なところがありましたが、5人の子供を育て79歳で亡くなりました。今思いますのに、母は、8月6日8時15分にあわすかのように、爆心地で亡くなる運命だったのでしょうか、もしあの時、私が、母に手を引かれて一緒に呉に行っていたら、私の今は無かったのだと思うと、運命を感じます。

人類史上はじめて、広島に原子爆弾が投下され、多くの人々が尊い命奪われ、そして今なお被爆で苦しんでおられることを思うと、このことを後世に言い伝えなければなりません。世界平和のために。